

エビデンスを探す・使う・作る 研究と臨床の架け橋

◆特集にあたって◆

研究する意味を探求する

「それってエビデンスあるの？」。これは筆者が看護師になり、当時やってみたいと意気込んでいたアロマセラピーを病棟で使えないか先輩に相談したときにもらった言葉でした。当時すでに学会も存在しており、論文も多く公開されていたのですが、それだけでは不十分なのだと衝撃を受けました。この先輩の言葉のおかげで、エビデンスとは何かを深く考えるようになり、今の研究者としての礎になっているように思います。

ある分野において、単純に研究数が多くなさればよいわけではなく、また、その分野が臨床に求められているとも限りません。研究は論文化することが求められますが、そこで終わってしまうとその先の臨床への還元につながらず、結局はただの紙で終わってしまいます。研究と臨床が共に協力して課題解決に臨まなければ、研究は研究者の独りよがりに過ぎず、社会の変化にも対応できなくなります。臨床がどのようなニーズを抱えているのか、研究者としてその課題へどう取り組むべきか。臨床ファーストの意識を常にもち、研究者としての専門性を活かすための方略を考えなければ看護学の研究者としての未来はないと思っています。

現在、筆者は臨床と他学部(工学)とでチームを形成し、1つの課題に取り組んでいます。本特集ではこの研究について、それぞれの立場から5項目の執筆をいただきました。また、小児看護学教育においてVRや駆動モデルを開発し、それを実証研究している研究者にも執筆をいただいています。研究者と

して足を踏み入れた大学院生2名には、学部卒後すぐに大学院へ進学した経験や、大学院でシステムティックレビューを学んだ経験について執筆いただきました。これらの記事から、研究者側から見るエビデンスへの考え方、そして臨床側から見る研究の価値について感じてもらえると幸いです。

また、2025年11月に行われる小児がん看護学会学術集会において、大会長を担うことになりました。そのなかで企画を考えるにあたり、多くの専門家にかかわっていただきました。また、委員会を開くなかでこの小児がんという疾患に関連した多くの課題について知ることができました。これらの課題を臨床のなかでどのように取り組むべきか、3人の専門看護師、2人の看護学研究者、1人の医師に執筆いただきました。これらの記事から臨床における問題点の共感と研究のヒントがあると確信しております。学術集会では教育講演として、エビデンスと臨床との懸け橋という、まさに本誌のテーマと合致した講演を古藤雄大先生(関西医科大学)にしていただきました。この講演内容を本誌でもご執筆いただきました。

本特集を通して、研究者が研究活動を行ううえでの自らの展望を考える機会に、そして臨床家が研究を理解してエビデンスを臨床で活用していく一歩になることを願っています。

植木慎悟 Ueki Shingo
九州大学大学院医学研究院保健学部門准教授